

子どもへの祝福の祈り

加藤 享

【聖書】マルコによる福音書 10章13～16節

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

【序】子ども祝福礼拝の喜び

日本では、女の子は3才と7才、男の子は5才の11月15日に、成長を祝って神社やお寺に参詣する七五三の風習があります。11月は収穫を終えて実りを感謝する月、15日は鬼宿日といって鬼が出てこない日なので、11月15日に収穫感謝と子どもの成長の感謝とこれからの加護を祈るようになったのだそうです。

私たちの救い主イエス・キリストは、幼い子どもたちをこよなく愛して、一人一人を抱き上げ、祝福の祈りをしてくださいました。そこで私たちの教会でも、特に11月には**子ども祝福礼拝**を守ってきています。牧師が教会を代表して、御前に進み出たいとし子たちに手を置いて、お祈りさせていただきました。イエスさまの祝福が、今ここにも豊かに注がれて、このいとし子たちが、心も身体も健やかに成長していきますよう、皆で心を合わせてお祈りしたのでした。このように**祝福の祈り**ができますことは、本当に嬉しいことです。

【1】主イエスの激しい憤り

イエスさまが子どもたちを祝福してくださった場面を、もう一度読み返してみましょ。ある日のことです。親たちが我が子を祝福していただくとう、**子どもたちを連れて**集まってきました。すると弟子たちが叱って、**追い返そう**としました。それを見てイエスさまは**激しく憤られて**、弟子たちを叱りつけ、子どもたちを呼び戻し、一人一人を抱き上げて、手を置いて祝福されたのでした。

何故弟子たちは追い返そうとしたのでしょうか。イエスさまが、エルサレムでユダヤ教の指導者たちに殺され、三日後に復活するという**大変な予告**を、弟子たちに繰り返し語り始められたからです。**愛に満ちた優しい救い主キリストが殺される**など、弟子たちの理解を超えた予告です。しかしただならぬ**緊張感**が弟子たちの間にも、生まれてきました。

そこへ親子たちがガヤガヤやって来たのです。「イエスさまは殺されるとおっしゃっているのだぞ。**のん気なことを!**」と弟子たちはいら立って「子どもは邪魔だ、あっちへ行った、行った」と**追い返そう**としたのでしょ。でもイエスさまは違いました。これを見て**憤り**、「子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」とおっしゃり、子どもたちを**抱き上げ**、手を置いて祝福されたのでした。

「**憤り**」とは激しい憤慨、腹立ちを表す言葉です。**マルコ福音書**は一番最初に書かれました福音書です。マタイ、ルカ福音書はマルコを参考にしながら、自分の集めた独自の資料も使って、それぞれの福音書を

書きました。この祝福の記事はマタイ、ルカにも記されていますから、弟子たちにとって印象深い大事な出来事だったのです。しかし面白いことに、マルコの「イエスはこれを見て憤り」という言葉を、マタイ、ルカ福音書共に削っています。学者たちは、「愛の主 イエスのイメージにふさわしくないと思ったからだろう」と解説しています。

しかし最初に書かれたマルコ福音書は、幼い子どもたちが祝福から遠ざけられたことに対して、イエスさまが**激しい感情で腹を立てられた**と語っています。私はこういうイエスさまのお姿に感動します。私たちは平穩無事な時ならいざ知らず、身に危険が迫った人生の難局に直面しますと、心の**余裕を失って**、子どもばかりか、もたもたしている大人でも、**蹴散らしてしまう**のではないのでしょうか。

子どもは、大人の心が平和な時は可愛らしいと大事にされますが、大人が心の余裕を失うと、手足まといだと**邪魔者扱い**にされてしまいます。今日の聖書の弟子たちがそのよい例です。ところがイエスさまは、どんな理由、どんな状況であろうとも、**子どもたちが祝福から遠ざけられること**を見過しにはなさらなかったのです。祝福にあずかるために、**神さまに近づけられること**こそ、何はさておき**一番大事**にされなければならないと、**心の底から真剣に**思っておられたのです。だから激しく憤られたのでした。私たちもその心を、しっかりと身に付けたいものです。

[2]神の国を受け入れる

イエスさまは、幼子たちが来るのを妨げてはならない理由として、「**神の国はこのような者たちのものだから**」とおっしゃいました。神の国は子どもたちのものだ、小さな子どもは純粹で汚れが無いから、無条件で天国に入れると、言われたのでしょうか。いいえ、**子どもでも**私たち大人が持っている**罪深さ**をちゃんと持っています。子どもの世界だっていさかいが絶えない毎日です。

ですからイエスさまは、神の国が子どもたちのものだとはおっしゃらずに、「**このような者たちのもの**」とおっしゃっています。更に言葉を続けて「**子どものように**神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」とおっしゃいました。**神の国を受け入れる**という点が強調されています。

当時の**ユダヤ教**の世界では、律法をよく学び、それを実行することによって、人は天国に入ることができると信じられていました。だから親は我が子を打ち叩いてでも律法に従わせていく責任がありました。神の国に入ることは、子どもにとっても大人にとっても、**たやすいことではない**と考えられていました。これに対してイエスさまは、**受け入れること**の大切さを強調されたのです。

神の国は、入学試験のように、良い成績をあげて合格するものではなくて、さあ入れてあげると差し出される**恵み**を、**有難く頂戴**することによって入れる所だと、イエスさまはおっしゃったのです。そうです。良い成績を上げなければというのでしたら、頭の悪い者はダメです。修業を積んでとなれば、意志の弱い者はダメです。たくさん寄付をすればというのでしたら、貧しい者はダメです。

ところが差し伸べられた手に、**無心に身を委ねる**ことが出来る**幼な子**のように、神さまがイエス・キリストを通して与えて下さろうとしている**救いの恵み**を、ただただ**有難く頂戴**することならば**誰にでも**できます。何も出来ない幼な子でも救われるとすれば、どんな人でも救われます。大切なのは**修業**ではなくて**受容**なのだ

とおっしゃったのでした。ここに、律法に立つユダヤ教と根本的に異なるイエス・キリストの福音の独自性が示されていたのでした。

イエスさまはこれからエルサレムに行き、十字架の死を遂げられます。彼が自分たちよりも優れていることを妬むユダヤ教の指導者たちが、自分たちと全く違う信仰に立つ彼を十字架につけようと待ち構えていました。しかしイエスさまは、人間の**その罪深さを我が身に引き受けて十字架の裁きに服し、赦しの救いを与えて下さった**のでした。

こうして、十字架のイエス・キリストを救い主と信じる者が救われる道が開かれました。この恵みを**有難く受け入れる者は誰でも**神の国に入れます。大切なのは**受容**なのです。ですからこの大切な信仰が理解されずに、無力な幼子たちが遠ざけられようとしている光景に、主イエスは激しい**苦痛と憤り**を覚えられたのでした。

[3] うるさかないよ

以前のことで、31歳の母親の投書を読みました。「2人の息子を連れて区役所へ行きました。エレベーターがととも込んでいたので、生後5ヶ月の下の子をベビーカーに乗せ、上の2歳の子を抱いて乗り込みました。すると上の子がぐずり出し、70歳位の男性に『うるさい』と怒鳴られました。上の階まで直行なので途中で降りることも出来ません。なだめていると、その人から『まったくしつけがなっていない』と、さらに怒鳴られてしまいました。自分の子育てを**完全否定**されたようで、悲しくてしばらく落ち込んでしまいました。」

確かに混んだエレベーターはうっとうしいものです。大人でもそうなら小さな子供にとってはなおさらでしょう。**ぐずついても当然です**。「もうちょっとだよ。我慢しようね。」「おりこうさん。おりこうさん」「お母さん、頑張ってるね。すぐ大きくなるよ」。声をかけて上げる言葉なら、ほかにも幾らでもありますね。どうして**怒鳴ること**しか出来なかったのでしょうか。

こんなイライラした心の人と一緒に暮らしている家族が**気の毒**ですね。70歳位になるまでの人生、この**ご本人こそ、自分をどのように教育し、しつけてきた**のでしょうか。年寄りの役割は、周りの人たちを和やかにすること、若い人たちを励ますこと。優しい一言があれば、子育てに奮闘する若いお母さんが、どんなに励まされたかわかりません。この男性は**優しい言葉**を知らずに育ってきたのでしょうか。」

信仰の詩人八木重吉の有名な詩が浮かんできました。「さて あかんぼうは **なぜに あんあん あんあん** なくんだろう ほんとうに うるせいよ あんあん あんあん あんあん あんあん うるさかないよ うるさかないよ よんでいるんだよ よんでいるんだよ かみさまを よんでいるんだよ みんなもよびな あんなにしつこく よびな」

「うるせいなー。いいかげんにして泣きやんでくれよ」と我が子にうんざりしながら、「いや待てよ。あれは神さまを呼んでいるんだ。**素晴らしいなー**」と八木重吉は歌いました。今日の聖書が伝える**イエスさまが与えてくれる感動**が、八木重吉にもこのような歌を詠ませたのでしょうか。怒鳴りつけて若い母親を落ち込ませた人も、イエスさまに触れていたら、優しい言葉をかけることが出来たでしょう。

〔結〕 信仰のゆり籠を大切に

幼い子どもたちは、優しいイエスさまが大好きです。お祈りが大好きです。神さま・イエスさまを心から信じてお祈りします。ところが単純に祈れなくなった大人たちが、子どもたちの単純な祈り心を大切に育てなくしてしまいます。信仰の大切さを低くみて、教会へ行くより勉強しなさいと行って、遠ざけてしまいます。子どもたちがイエスさまの腕に抱かれて、豊かな祝福に与りつつ成長できるかどうか、それは周囲の私たち大人の態度にかかっています。

いとし子を与えられているお父さん、お母さん。手を差し伸べて下さっているイエスさまに、我が子を差し出して、祝福を豊かに頂き続けながら、ご自分たちも、与えられた養育の務めを果たしていけますように。ご自分たちのふところが、我が子の信仰のゆり籠です。

祈ります：主なる神さま。あなたはイエスさまとなって、私たちのところに来て下さり、あなたの深い愛を現わして下さいました。特に今日は、弟子たちに追い払われた幼い子どもたちを、一人一人抱き上げて、手を置いて祝福して下さいましたイエスさまのお姿を、今一度お示しになりながら、私たち教会家族に与えられた子どもたちと一緒に礼拝を守ることが出来ましたことを、心から感謝します。子どもたちが心も体も健やかに成長していきますように、お守り下さい。その家庭を、そして私たちの川越教会を、豊に祝福して下さい。イエス・キリストによって、お祈りします。 アーメン